

6 年 A 組	生き方について考える	志場 俊之
---------	------------	-------

1 単元について

(1) 国語科の授業でめざす学習文化

私たちは、物事を認識する際によく比較を用いる。簡単な数量の比較からはじまり質の比較、価値の比較など、ふだんの生活の中でも無意識のうちになされる、一般的であり普遍的な認識方法の一つである。本校の国語科では、この比較を場面の様子や主人公の心情、語句を認識する際に用いることによって、より分かりたい対象を認識し、文章理解へつなげていこうと考えた。

実際の学習では、より深く認識したことを、比較を用いながら話し合うことにより、自分の考えを「何とどう比べてどうである。」というように対象をいろんな角度から見て創りあげた考えを伝えることができ、相手の考えを自分が創りあげた考えと比べて、新たに自分の考えを作り直していくことができる。比較による認識力の高まりを伝え合うことが、より高い認識力を生んでいき、伝え合いの質の高まりを期待できるのである。

話型では、「ふつう、～は～だけど、この主人公は～だから～だ。」や、「もし、自分なら～しているけれど、～は～だから自分の考えを貫く人だと思います。」のように、「ふつうは」とか「自分なら」とか、自分の生活経験の中から創りあげられた自分なりのものの見方・考え方と比べた発言ができるようになるであろう。

また、「～の意見は、～を～と考えて言っているけれど、～は～だから簡単に優しいというのではなく、～ということも考えていかなければならない。」のように、相手の意見と自分の意見の比較と、相手の教材の読み取りと自分の教材の読み取りの比較を合わせた複雑な意見交換も可能になってくる。

言葉にこだわり、比較を意識させることで、教材とじっくり向かい合い、相手の考えをじっくり聞き、お互いの意見交換がより質の高いものになり、お互いの読み取りのよい点悪い点を指摘し合いながら、より深く物事を認識していき、より質の高い伝え合いのできる学級集団を創りあげていきたいと考えた。

(2) 教師の願い

今まで学習した「生きることについて考える学習」の詩「あいたくて」、物語「海の命」、「山のいのち」、「街のいのち」で、主人公の生き方について、自分の生き方と比べながら、幅広く「生きる」ということについて考えを持てるようになってきている。場面の様子や時代背景、周りの人とのかかわり、出来事など、取り巻くさまざまな条件の中での主人公の思いや行動を、自分と比べながら評価し、自分のものの見方や考え方や価値観を広げてきた。

そこで、さらに自分のものの見方や考え方や価値観を広げるために、自分の生き方と障害を持って生まれてきた子の生き方とを比べることで障害者のおかれている立場や気持ちを理解し、自分がどうかかわっていくべきなのかを考えさせていきたいと思ったのである。

最近、バリアフリーという言葉が日常化している。施設についても点字ブロックや点字案内板、スロープなど、障害を持った人を配慮したものが多く見られるようになってきている。これはとても喜ばしいことで、障害者が社会の中で同じように生活できる基盤が整いつつあるということ

ができる。多くの人が福祉に目を向けるようになってきている証拠とも言えよう。

しかし、その事を手放しで喜んでいいのだろうか。施設の充実とともにしていかなければならない、心のバリアも取り除けているのだろうか。私には、子どもたちの心の育ちが足りないように思う。見かけたら手を貸したり声をかけたりするとかもっともらしいことを言っているが、逆に特別視しているように見えてならない。厳しく言えば、好奇の目で見ている子さえいるのではないだろうか。

人権という立場から考えると、人を軽く見ているというような場面をよく見かけることもある。学校の中で人が人をいじめる。悪口をいう。人に冷たくする。悪いうわさを流す。大人の社会でもそういうことは存在する。メディアでも、例えば、テレビで、人の格好や行動、言葉をあげつらう場面を見かけることがある。それを茶化したりお笑いとして扱っているのである。社会がそういうことを許しているというよりは、そういうことを進めているように見えてならないのである。そういう環境の中で育つ、人を思う心や人の大切さってどんなものなんだろうかと考え込んでしまう。

だからこそ、この単元を大切にしたいと考えたのである。

今までの単元での「生き方について考える」視点は、自分がどう生きるかということに重点を置いた。今回の単元では、人とどうかかわって生きていくかということも大切になってくる。母や姉や先生のきいちゃんへのかかわり方を通して、障害者へのかかわり方を学ぶことになるだろう。それとともに、きいちゃんのひたむきな生き方のすばらしさ、生きることの意味について考えさせたかった。

いっしょに生活しなければ本当の理解はできないのかもしれない。いっしょに生活しなければ見えてこないものもあるだろう。話し合うためには一律の経験も必要なのかもしれないが、もしかしたらないかもしれない一人一人の生活の中での体験の中で障害者についての理解を深めるといふ難しい状況での話し合いになることは予想がついていた。

ただ、本文で「わたし」の視点で描かれているきいちゃんの性格や思い、行動について、細かい描写をもとにしっかり読み取ることできいちゃんの気持ちに近づき、自分と障害者との今の距離を考えてもらいたかったのである。

(3) 教材について

この物語「きいちゃん」は、小さい時の高熱のために手足が不自由になった主人公きいちゃんが、困難を乗り越え生きがいを見つけていく過程を、きいちゃんの先生である「わたし」の視点から描いている。

母から姉の結婚式に出ないでほしいと頼まれ、「生まれてこなければよかったのに。」と自分の生まれたことを否定的に捉えているきいちゃんが、姉の結婚式のお祝いのためのプレゼントを送ろうと一生懸命取り組み始める。

その後、姉からの出席依頼、結婚式での姉のスピーチ。姉から「妹はわたしの誇りです。」と言われた喜び。認められた喜びに「生んでくれてありがとう。」と自分を肯定的に捉えることができるようになり、和裁を一生の仕事としていくのである。

「きいちゃん」では、浴衣の中に詰まったきいちゃんの姉に対する思い、母の子どもたちへの思い、姉の妹への思いに迫っていきたい。家族がお互いを尊重し、大事に思うことで家族が一層深まっていく関係がここにある。大事にして、大事にされる関係の中でこそ成長できる家族の絆がある。そういった、きいちゃんを取り巻く周りの人の温かさを感じてほしいと考えた。

また、「きいちゃんは、きいちゃんとして生まれ、きいちゃんとして生きてきました。そして、これからも、きいちゃんとして生きていくのです。」の言葉に込められた「わたし」の思い、「生まれてこなければよかった。」と思うきいちゃんが、お母さんに対して「生んでくれてありがとう。」と言うようになった心の変容を読み取らせたいと考えた。現代の社会では、社会的には弱者である主人公自身が強くならなければ生きていけない状況がある。そんな中で自分の中に起こるさまざまな困難に立ち向かいながら強い意志を持っていきいちゃんの心の変容を、自分自身のこれからの生き方に重ねながら追っていきたいと考え、本単元を設定した。

2 実践の考察

(1) 単元について

子どもたちは、場面の情景に主人公の心情をからめながら、自分なりの考えを持つことができるようになってきている。本単元では、お母さんの取った行動についてどうなのか、お母さんの家族が抱えている社会的立場に対する行動に批判が集中した。お母さんの取った行動は社会的な弱者に置かれている障害者を隠そうという行動ではないのかという内容の意見が多数であった。にもかかわらず、自分が母親の立場に立って考えると全否定もできない。読者の立場と自分に降りかかった立場でこのお母さんが取った行動を考えることによって作者の願いに迫ることができた。

それは、簡単には解決できない理想と現実のギャップが実際に存在しているという事実を再確認できた1コマと言えよう。その現実をしっかりと把握できたからこそ批判しながらも悩むことができたのではないだろうか。

しかし、それは、すべての児童に当てはまるというわけではなく、表面的な読みで終わっていることも多い。たとえば、悩むこともなく間違いなしにお母さんの取った行動が悪いと考えている子がいることである。「では、なぜ、お母さんがそういう行動を取ったのか。」というところに疑問を抱かず自分の結論を導き出すことは、一方的なものの見方かもしれない。心情が表れている文章は選べても、その文章の中のどの言葉が気持ちを特に表しているとか、この言葉によって願いの強さがわかるとか、より深い読みへと向かわせることがまだできていないのではないだろうか。

母親の心の葛藤に寄り添うためにも、障害者の立場理解に努められるような副教材の活用や障害者との交流などが必要だったのではないだろうか。

また、主人公きいちゃんの心の変化を追っていく場面でも、主人公の生き方に少なからず影響を受けた子が大勢いたことにうれしさを感じる。自分たちもそういう生き方をしたいと感じているのである。それは、主人公を障害者だからどうだというような、障害者としてみるのではなく、そういうことを乗り越えて一人の人間の成長としてみていることがうれしいのである。人間と言うものは、成長していく中で、悩みぬいたり黙々とやり遂げたりすることが一つの転機となり、その転機が人間を伸ばすことを子どもたちは感じ取ったに違いない。

子どもたちは、感想の中で、「人間が成長するためには、何かのきっかけが必要なのかな。」とか、「きいちゃんは、その事件があったおかげで生涯の仕事を見つけたな。」とか、「このことで家族の絆が深まったような気がする。」とか「自分にもこのような出来事がいつか起こるのかな。」とか書いていた。きいちゃんの変容を、「人間は、悩み事を解決していく上で大きくなっていく。自分もきっかけをつかみたい。」と読み取ったと考える。

②着目児について

A君は、いつもおとなしく、言われたことをきちんとこなすまじめな性格で、とても優しい。その子が「自分を変えたい。」と言った。気が優しすぎるため自分の気持ちを強く言えない。そんな性格のA君にとって、「結婚式に出ないでほしい。」と母から言われながら姉のためにプレゼントを作り続け、さらに、自分の生涯の仕事を見つけ強く生きていくきいちゃんの生き方はとても立派に見えるだろう。きいちゃんの生き方をみんなで話し合う中で、自分の生き方を見つめ、気持ちを動かしてほしいと願っていた。

単元の学習の中で、A君は、「きいちゃんは、さびしそうにしていたのに、一つの出来事でとても明るくなって、一つだけの出来事で人ってこんなにも変わるんだなと思いました。熱心に縫い続けたきいちゃんは心が強いなと思いました。」との感想を記していた。きいちゃんの前の様子と一つの出来事が起こった後の様子を、「人ってこんなにも変わるんだな。」と表現しているところから察すると、人は思い次第でいくらでも変わることができるということを感じているに違いない。「こんなにも」という劇的な変化をうれしく思っていると同時に、A君のその後の表情を見ているうちに自分にも置き換えて自分を鼓舞するような言葉にも思えてきた。A君のこれからの動向に注目したい。

3 今後の課題と展望

現在、比較を用い、複数の視点からものを見る感覚を養っているところであり、多面的な読み方を与えていくことがものの見方や考え方を深めるためにも重要であると考えます。

「海の命」でも、主人公太一が、父や母、与吉じいさの影響を受けながら一人前の漁師になっていくのだが、とる前の心の葛藤ととった後の心の落ち着きを比べることで、太一の成長を感じ取ることができる。主人公の事件の前後の気持ちの比較をすることで主人公の心の成長をより感じることができることは分かった。

主人公の心情の変化を捉えるためには、主人公を取り巻く周りの状況や主人公と関わる人物との関係を把握し、お互いの心情を考えることでより主人公の心情に迫っていけるものと考えます。

今後は、さまざまな角度から比べる操作を取り入れることで、心の変容をより確かに捉えられるようにしていきたい。

「書くこと」については、発表児童の意見を聞きながら自分の考えを整理して書くこともできるようになってきている。まとめの感想では、作者の願いや生き方にかかわりながら作品を眺める観点で書かせており、広い視野にたったものの見方を豊かな表現で相手に伝えられるような文章になるよう、言語感覚も磨いていく必要がある。

また、主人公の生き方に自分をだぶらせたり、生き方について書かれている作品どうしを比べそれぞれの生き方に共通している事柄を整理しながら書かせていきたい。

ここでも、比べることを意識して書かせることによって、書く量はもちろんのこと、ものの見方や考え方をより育てていきたい。

4 実践研究テーマの設定

現在、比較を用いることで心情変化を捉えやすくなることは分かっている。

今後、比較を、ものの見方・考え方を育てる一方法として確立していきたい。

また、ものの見方・考え方を伝え合う力へと押し上げる方法も考えていきたい。